

シャーウッド・アンダーソンのアメリカ

森本真一

Sherwood Anderson's America

Shin-ichi Morimoto

Abstract

Sherwood Anderson, who was to gain a reputation with *Winesburg, Ohio*, suddenly left his position as manager of a manufacturing company, apparently feeling disgusted at the nature of the business world. Later, in *The Modern Writer*, he pointed out that mechanization brings about standardization, and in his introduction to *Perhaps Women* he expressed his worry about modern man losing his manhood because of his reliance upon the machine. According to a woman who appears in his *Puzzled America*, America is more cheerful than Europe. She eagerly expects America to be a country without any dictators or creeping fear. *Home Town*, which was published the year before his death, deals with his tender affection for life in small towns. By analyzing both his fictional and nonfictional works, this paper aims to ascertain how Anderson saw his native country and formed his view of America, taking into consideration the effect of his stay in France.

シャーウッド・アンダーソンはオハイオ州イリリアで経営していた塗料の製造所で1912年のある朝秘書に手紙を口述筆記させていたが、突如それを中断するとあまり長い間川のなかを歩いて足が濡れたと口ずさんで事務所を出て行き、4日後クリーヴランドで発見されたときには自分の名前すら覚えていなかったと伝えられる。

それから7年ほど過ぎた1919年にアンダーソンは『オハイオのワインズバーグ』(*Winesburg, Ohio*)を発表してアメリカ文壇での確固とした地位を得ることになるが、この作品は近代化の波を受けようとしている田舎の町ワインズバーグに住む人たちが苦悩を抱えて蠢く様子を、ひとつの長編小説とも短編の集まりとも見做せる体裁で書き綴っている。各々表題を付けられた20余りのエピソードから成り立っていて、新聞記者として働く青年が殆どすべての話に登場し、あるときは聞き手や作中の事件の目撃者の役割を果たし、またあるときは異性との初めての交わりや母との死別を経験して最後に活動の場を求めて故郷を離れ、どこか大きな都会へ向かう。同じようにアンダーソンもある程度高い評価を受けるようになると、さらによく知られるためできるだけのことをしようと思ってニュー・ヨークへ行ったと自伝的な『物語作者の物語』(*A Story Teller's Story*)に記している。

しかし彼がニュー・ヨークで知り合うことを望んだヨーロッパや芸術の歴史について自分には理解できないたくさんを知っているはずの作家たちも混乱していて、どんな本を書けばよいのかわからず書店でどんな本が売れているかを調べている始末だったので、このように芸術を営利の手段とする連中は中西部で見えてきた労働者や実業家より遥かに劣るのではないかと感じたこと、大都市、洗練、

歴史と伝統、あるいはヨーロッパ的なものへの幻滅の思い出めいたことを告白している。

1921年にアンダーソンは友人で批評家のポール・ローゼンフェルドに誘われてしばらくフランスを旅する機会を持った。この旅行中の見聞録がマイケル・ファニングという研究者の手で緻密に書き写され『フランスとシャーウッド・アンダーソン 1921年パリの手帳』(France and Sherwood Anderson. Paris Notebook, 1921)と題して出版されている。アンダーソンはそのノートのなかでアメリカ人が物質的な発展への長い間の確信を失い、それに替わる新しいものを見出すことができず疲れた表情をしているのと比べて、自信たっぷりに見えるフランス人たちは彼らをあれほど自己満足的にする何を見つけたのだろうと訝っている。『物語作者の物語』に「当時私には私の祖先や周りの人たちの祖先の血を通じて — イギリスヘイタリアへそしてスウェーデン、ロシア、フランス、ドイツへと — 古い場所、古い町、古い衝撃にさまよいながら戻ろうとする何かがあったのだろうか」(注1)という件があるが、ファニングはこれに関連して強迫観念を伴う美への献身を何世紀にも亘る同じような献身の所産と交わることによって甦らせる願望こそ、アンダーソンがフランスへ持って行ったものだと推論している。

アンダーソンはノートに「美が生まれるときには常に恐るべき代償が正当化されるらしい。アメリカの子供たちすべてがサント・シャペル、シャルトルの大聖堂、フォンテンブローの離宮の書斎を見られたらどうだろう。・・・石に石を重ねて歳月が過ぎ、美しい瞬間が訪れ、献身と畏怖と賛美をもって美しく刻まれた石は時代を越えて聳え立つ。石に重なる石。そこには完成された美しさがある。それが厳かで恐ろしく驚くべきだと言わない者はいないだろう」(注2)と書き記した。特にシャルトルの大聖堂については、かつて見たどんな芸術作品よりも自分を心から喜ばせると述べている。

その聖堂を目の当たりにしながらアンダーソンは不思議なことを体験する。ひとりのアメリカ人が女をふたり連れて来るが、女たちのうちひとりにはフランス人でもうひとりには男の妻か恋人とらしいアメリカ人だった。男はフランス人の女に関心がある様子で、一度3人でなかに入って行った後アメリカの女は聖堂のドアに顔を付けて泣く。ふとアンダーソンはそのドアに彫刻を施した職人の胸中を慮って「如何なるときにも彫刻家には刻むべき石があり、画家の魂を掻き立てる小さな輝くものがあり、物語の語り手には考え抜き夢見る題材としての人間の命の絡み合いがある」(注3)とひとりごつ。あのアメリカの男は女と婚約してからパリに来たけれど女が男と会うため渡仏する途中に男はフランス人の女と恋に落ちたのではないか、などとアンダーソンが思い巡らしていると、例の3人は急に聖堂から出て来て何も言わず歩み去る。彼はその姿を見てあらゆる物語とは正しくこのように、仄めかしと暗示によって想像力に訴えるものなのだと感じる。アメリカでの生活の局面、例えばクリーヴランドの公園で少年が目の前を通り過ぎた刹那に見せた表情の美しさに魅せられ、何故画家にならなかったのだろうと悔やんだことが彼の脳裏に浮かぶ。そしてまもなくアメリカへ戻ろうとしているアンダーソンは、西欧世界の未来がアメリカとともにあると直観するのだった。

アンダーソンは彼自身の代表的な長編小説『貧乏白人』(Poor White)の主人公ヒュー・マックヴェイが人生に空しさを感じて旅に出たとき集めた輝く石のことを『物語作者の物語』に書いた。貧困と怠惰の故に黒人にすら蔑まれていた白人の典型と言えるジョン・マックヴェイの息子としてミシシッピ川沿いの町に生まれたヒューは、やがて岸辺の木陰でぼんやり過ごすことの多い少年になる。彼は

父親が喧嘩で死んでから数年さまよった後、オハイオ州ビドウェルに住み着いてキャベツの植え付けやとうもろこしの刈り取りに使う機械を考案し始める。ビドウェルに手作りの馬具に執着するジョーゼフ・ウェインズワースという職人がいる。その店に雇われた渡り職人のジム・ギブソンは工場生産された馬具を手作りと偽って売っていたが、ジョーゼフをセンチメンタルな老いぼれと罵り、怒り狂ったジョーゼフが刃物を研いでジムの首を切り落とす事件が起きる。取り押さえられたジョーゼフはヒューの首を締めて歯で噛み付く。ヒューには自分が無駄な労力を減らす機械を発明してきたと思いついてもできなくなってしまう。その何年か後ヒューは仕事でピッツバーグへ行き、駅で汽車を待つ間に以前拾ってポケットに入れておいた石をしみじみ眺める。日の光を受けてさまざまな色を見せる石はヒューの心のなかでもきらめき始めた。「そのとき彼は発明家でなく詩人になった」(注4)と作品には記してある。

1925年に刊行した『現代の作家』(*The Modern Writer*)でアンダーソンは工業の発達に伴う機械化は画一化をもたらすと指摘した。『貧乏白人』にはビドウェルでもほかのアメリカ中西部の町でも大々的な工業化の渦中で多くの人たちが功利的で打算的な考え方をする傾向を帯び、甘美なものを求めるゆとりをなくしつつある状況が取り扱われている。しかし社会や人間を画一化する機械を発明するはずのヒュー・マックヴェイを、アンダーソンが夢想に陥り勝ちで詩的な人物として描いたことは興味深いと言えるだろう。しかもヒューは自分と周囲の人たちが目には見えないが堅固な壁で隔られているのを意識し、妻との間にさえ根強い違和感を抱いている。ヒューは画一化の方向に進む社会の趨勢から取り残され孤立する存在だと見ることもできよう。アンダーソンはヒューが集めた石は「彼の安らぎになった。人生における努力は空虚で無意味な観があったが、小さな石はきらきらと輝き鮮やかな何かだった」(注5)と説明し、「私は作品をこんな調子で閉じたが、知人の多くは私が何を訴えているのかわからないと言った。それは多くのアメリカ人が生活の煩わしさを離れてときどき手に取って磨く小さな色の着いた石のような何かに対する欲求をまだ意識していなかったためだろうか」(注6)と推測している。そして「少なくとも私はそれをさほど明瞭かつ知的ではなくとも意識していた。その意識が私を絶えず不安がらせ、転々と町から都市へ、都市から別の都市へ徘徊させた」(注7)とも回想している。

作家になったアンダーソンは仕事を愛し「仕事をしているとき以外で一番幸せだったのは、あの聖堂の前に座っていた日の一色の着いた石を集めて手のなかで何度も回しながら座っていた日の気分にひたる時だった。あの女をふたり連れた男が私の手に石をもうひとつ落とした。手は石で一杯になった。アメリカでの生活から何となくさんの美しい輝きが私に降り注いできたことか」(注8)という感慨を漏らしている。「その石を刻んでできるものならもっと美しくするのが私の役目なのだが、手が震えることが度々あった」(注9)と告白したアンダーソンにとって、フランス滞在がアメリカを素材とする芸術家としての使命感に目覚めるひとつの大きな誘因になったことは間違いなからうと思われる。

アンダーソンはボストンの名家の生まれで長い滞欧経験を持つ歴史学者のヘンリー・アダムズにかなり関心を持った形跡がある。アンダーソンはアダムズの『ヘンリー・アダムズの教育』(*The Education of Henry Adams*)に書かれた「アメリカの聖母は敢えて崇敬を集めず、アメリカのヴィーナ

スはその存在を主張しない」(注10) という箇所が「アメリカ人は愛も信仰も持てないという非難」(注11) だと反発してアメリカの知的生活がニュー・イングランドの支配から脱する必要性を唱えようとした。

アンダーソンの短編「ニュー・イングランドの人」(“The New Englander”)はヴァーモント州で育った女がアイオワに移住してとうもろこしの畑で激発させる恐らく性的な衝動を描いている。また「オハイオの異教徒」(“An Ohio Pagan”)と題した作品では脱穀を手伝う若者が、信心深い雇い主の祈りに答えて好天をもたらす若い神イエスが自分を近くの丘から見ている姿を想像するが、やがてイエスは消えあらゆるものが女の形を帯びてきて、女に愛される冒険の場としてのアメリカに思いを馳せる。

因みにイギリスでの迫害を逃れて大西洋を渡りニュー・イングランドを拠点に理想の社会を築こうとしたピューリタンは謹厳だと見られ、特に性的な意味で過度に潔癖だという印象がある。しかし「中世全般を通じてカトリック教会では性愛は本来邪悪でその対象が配偶者である場合も邪悪には変わらないという考え方が支配的だった。…アウグスティヌスにとって夫婦間の性行為は罪ではないが常にそれに伴う情欲は汚らしい。グレゴリウス一世も同意して夫と妻が生殖ではなく快樂のために性交渉を持つと快樂が彼らの交わりを卑しくすると付言した」(注12) のに対して「ピューリタンの指導的な説教者が(妻を『愛らしく好ましい鹿』に譬えている)箴言第5章18と19を解釈した際に雌鹿が例に出されたのは、鹿の雌が雄に『発情と欲望に狂うほど』強く愛されているからだ」(注13) という指摘もある。その一方でジョン・マッコネルが『ことばと文化』(*Language and Culture*)のなかで、肉体は邪悪で精神は善だとするピューリタニックな価値観への反動として肉体による表現に関心が持たれるようになったことと、ダンスやダンサーにまつわる映画の興行的大成功との関連について述べた。ピューリタニズムが肉体や性をどう意味付けそれをアメリカ人がどう受け取っていたかは単純な問題ではないと言えそうだ。

アンダーソンは「我々の文化は依然ピューリタニックなニュー・イングランドの文化なのだ。…ニュー・イングランドに住む人にとって生活とはここで今味わうべきものではなかった。現世での生は死後の生のために費やされた。同胞への愛はニュー・イングランド人の理論の体系には入らず、芸術は道德の僕となった。ニュー・イングランドに住む人には生活について語ってはならないとされていることが余りに多く、人々は生活に余り心地よさを抱かず、その結果としてニュー・イングランドが支配的だった間に、アメリカの作家は上品さと立派な行いを愛好するようになった」(注14) と考えていた。また彼は「文学作品には中心となるプロットがなくてはならず、道德を提示して知性や教養を高めよりよい市民を作るべきだという、途方もないアングロ・サクソニックな論理がアメリカの著作を跳梁していた」(注15) と憤った。

マックス・ガイスマーが「オハイオの異教徒」はアンダーソンがオハイオの原住民で「我々がよく知っているピューリタニズムと並行してそれを補うホーソン、メルヴィルに始まりドライサーやアンダーソンに直結する中枢の流れに属していた」(注16) ことを物語ると見ている。メルヴィルはホーソンの魂の奥に地球の裏側にも匹敵する暗黒があり「ホーソンがこの神秘的な暗黒を単に光と陰の絶妙な効果を生む手段として用いるのか、それとも彼には本人でさえ気付いていないピューリタニックな憂鬱が潜んでいるのか — 私ははっきりわからない。だが彼のこの大きな暗黒の力はどのような形であるにせよ深く思考する者なら決して完全には逃れられない墮落と原罪に関するカルヴィニックな意識に

訴える」(注17)と記し、ホーソンの暗黒が自分を引き付け魅了すると述べた。これらふたりの作家にとってピューリタンを圧迫していたであろう罪悪感は重大な関心だったと推察できる。なおドライサーはしばしば不道德だと攻撃されたが、けたたましい筏乗りや胸毛が濃い猟師や樵たちの時代と違ってアメリカに歓喜と健全さがなくなった今、自分を取り巻く生活から目を背けないドライサーは健全だとアンダーソンが随想「未熟さへの弁明」(“An Apology for Crudity”)に書いている。アメリカの文学や文化一般の歴史について考察する際、ガイスマーの上記のような見方は有効ではないかと思われる。

1925年ごろアンダーソンは後にノーベル賞作家になるウィリアム・フォークナーと親交を結んだ。アンダーソンはフォークナーに「君には才能があり過ぎる。余りに容易に何通りものやり方で書くことができる。気を付けないと何も書かないことになりかねない」(注18)と注意し「君はどこかに出発点を持たねばならない。……君が知っているのは出身地ミシシッピの小さな範囲だけだが、それもアメリカなのだ。……それを取り除いたら壁から煉瓦が引き抜かれたように全体が崩れる」(注19)と諭したそうだ。これはフォークナーにまもなくヨクナパトーフアという架空の郡を深南部に想定して壮大な連作長編小説の執筆に着手させる契機ともなった実に重要な助言と見ることができよう。

ところでアンダーソンはポール・ローゼンフェルドに「男根を崇拜するチューホフ」(注20)と呼ばれたことがあると回想しているが、フォークナーはアンダーソンをロシアあるいはフランスの作家と結び付けるのは不適當だと主張して「私はアンダーソン氏は生地オハイオの活力溢れるとうもろこし畑だと考えたい」(注21)と1925年に発表した短いアンダーソン評に記している。同じ文章のなかで彼はアンダーソンの短編集『馬と人間』(*Horses and Men*)に触れて「馬は正しくアンダーソン氏が生まれ出た土壌の一部なのだ。彼の祖先は馬で土地を開拓し、とうもろこしが栽培できるよう馬で土地を耕し慣らした。無数の人と馬の体と汗が土地を肥沃にするのを助けた」(注22)とも言った。とうもろこしは極めてアメリカ的な穀物だと思うのでフォークナーがどの程度深い意味でアンダーソンをとうもろこしの畑に準えたのか興味がある。

フォークナーはアンダーソンから眠りと馬とを交換する奇妙な夢の話の話を聞かされたらしく1953年に「シャーウッド・アンダーソンについての覚書」(“A Note on Sherwood Anderson”)にこんなことを書いている。

このとき彼は既にベンチに座って笑っていた。彼は何を笑っていたのか即座に言った。夢だ。前の晩に田舎の道を何マイルも歩いた夢を見た。一夜の眠りと交換するための——その晩横たわる粗末なベッドではなくただ眠りと交換する馬を引いて。そして私が聞いていたので、それを磨き上げて彼がものを書くとき常にそうしたように冗長な(それは不器用な印象を与えるが実際そうではなく、模索であり探求だった)殆ど耐え難い忍耐と寛容の力でそれを芸術作品にしたが、聞いていた私はその一言も信じていなかった。それが眠っているとき見た夢だということを。何故なら私の方がよくわかっていたので。私は彼がそれを発明したのを、それを作ったのを知っていた。彼はそれの大部分か少なくともある部分を私がそこで見ながら聞いていた間に作ったのだ。彼には何故それが夢だと言い張ることを余儀なくされるのか、またその必要があるのか、夢と眠りと

に関連がなくてはならないのかわかっていなかったが、私にはわかっていた。彼が自伝の全編をひとつの逸話か譬え話に書いていたからだった。その馬は（最初は競走馬だったが今では農耕馬として馬車を引き鞍を着けられて土を耕し強健で役に立つが血統書はない）競馬場でよく見る明るいブルーのシャツと奔放な蝶結びのネクタイ姿の彼がユーモアと忍耐と寛容、とりわけ忍耐と寛容の精神を持って純粹で高潔な夢と過酷で不断の努力と『オハイオのワインズバーグ』や『卵の勝ち』（*The Triumph of the Egg*）に象徴される成果を上げる代償として差し出そうとした豊かで力強く温和な広がりを見せるミシシッピ川の流域、すなわち彼自身のアメリカを表現している。（注23）

この夢が作為かわかりにくい話とそれに対するフォークナーの反応から、当時のアンダーソンが何について如何に書くか深刻に悩んでいたと察せられる。そしてそのことは生き方の問題にすらかかわっていたと推測できる。と言うのはフォークナーとの出会いから2年ほどが過ぎたころ、アンダーソンはヴァージニア州のマリオンという町で週刊の地方紙をふたつ買い取り編集の仕事を始めた。全国的にはまず知られていない新聞の編集者になるために、小説家としてかなりの名声を得た者が私費を投じたのはめずらしいことではあろうが、本人としてはそのころある出版社と契約を結んで毎週100ドル受け取っていたのを負担に感じて、1927年の秋に「心の平穩のために著作で生計を立てるのを諦める決意をした。一定の速度で書き続けなければ飢えると考えることは何事にも自由に組み込む姿勢を著しく妨げる」（注24）と手紙に認めた。同じ年マリオンで農産物や家畜の品評会が開かれたとき、たまたまこの町で小さな週刊新聞がふたつ売りに出ているのを知ったアンダーソンは、広告会社の社長をしていた友人から借りた5,000ドルでそれらの地方紙の編集長の座に就いた。

かつて実業界から撤退したアンダーソンが今度は筆力の限界を感じて創作活動から逃避しようとしたのか。そうでもないようだ。彼は新任編集長の挨拶で「私自身が執筆するコラムでは周囲の生活と外の世界での生活に関連して私自身を独自の方法で表現するつもりだ。人は誰も自分の目を通して見た人生への反応を表現しなくてはならない。ふたりの人が物事を同じように見ることはない」（注25）と何やら現実の認識と文章表現の理論らしきものをちらつかせている。

こうして新しい著作の分野を開拓しつつあった1920年代後半から30年代に差し掛かるころのアンダーソンだったが、彼は私生活においても転機を迎えた。アンダーソンは生涯に3回の離婚を経験しており、3人目の妻と別居の期間を経て離婚したのが1932年で、その翌年に終生の伴侶となったエリノア・コペンハイヴァーと結婚した。エリノアはワイ・ダブリュー・シー・エーで働く傍ら政治経済学の修士号を取得するほど知的で行動的だった。女子の労働者が置かれていた状況に興味があったエリノアに同行して、アンダーソンは1930年から31年に掛けてしばしば南部の工場を訪れた。そして1931年に出版した『きっと女たちが』（*Perhaps Women*）の序文に「機械を用いる現代の風潮のため男は本来の特質を保持することができなくなり希望は女に見出される」（注26）と次第に強く確信していると書いた。「科学者が古い神秘を奪い去り、新しい神秘を与えてくれる詩人は現れていない」（注27）状況の下で「現代の男は自分が作り出したのではない品物に溺れ」（注28）「ひとつの場所からほかの場所へ、見出すことのできないものを空しく捜しながら移動している」（注29）が、こうした現実的な時代にすら「女の神秘には機械も触れられない」（注30）とアンダーソンは考える。1935年にアンダー

ソンは『混迷するアメリカ』(*Puzzled America*)に王女と名乗るヨーロッパ人を登場させた。この女は第一次世界大戦の後アメリカへ渡って大恐慌の直前ヨーロッパに帰り、目下再びアメリカへ来ている。王女の見方によればアメリカには恐慌のさなかにも依然として「ヨーロッパと比べると明るく生き生きした何か」(注31)がある。そして「独裁者が侵入せず忍び寄る恐怖もない強い国が世界にひとつは必要だ」(注32)と女は両目を手で被って語る。ここで王女が使う独裁者という言葉は、ドイツやイタリアの全体主義者を指しているだけでなく、神秘的であるべき心の奥までも無神経に蹂躪して人間を機械の部品同然に動かそうとするアメリカの体制へのアンダーソンの憎悪を仄めかしたものと推測できそうだ。

アメリカをこのようにさまざまな角度から見たシャーウッド・アンダーソンがその死の前年の1940年に上梓したのが『故郷の町』(*Home Town*)である。『故郷の町』の冒頭近くアンダーソンはある若者が「私に少しいららして腹を立てている。それは私がこじんまりした眺めのオーク・ヒルの町が好きで、偉大な思想家や群集を動かす人になろうとするとどんな結果になるか疑問に思っているからだ」(注33)と記し、「外の大きな世界は目下余りにも混乱に充ちている。私にはこの混乱した事態のなかでの我々の唯一の希望は、小さく考えるよう努めることだと思えた」(注34)と唱えている。アンダーソンには「リンカーンのような人はイリノイのスプリングフィールドを全く離れなくてもやはりリンカーンだったと思える。彼は樹木が成長するようにイリノイのスプリングフィールドの土壌から、親しく知っている周囲の人々の間から、自然に成長したと思える」(注35)。そして「多くの血の混合体としてのアメリカ国民は絶えず明らかに新しい人種になっていく。アメリカ人とは町において最もよく研究され理解され得る人種」(注36)で「町に住むのは人間の適応能力のテスト」(注37)にほかならず「来る日も来る日も通りには同じ顔がある。他人ともう少し親密に生きるための問題がなお執拗に残っている。民主主義の本当の試練は町に訪れるかも知れない」(注38)が「町に住むさまざまな人たちが町を彩っている。小さな町ではあらゆる人の特質が知れ渡る。逃れることはできないのだ。町での暮らしはときに恐ろしくまた計り知れないほど楽しく面白い」(注39)とアンダーソンは書き綴っている。

なおアンダーソンは『故郷の町』と同じ年に「パストラル」("Pastoral")という作品も発表した。「パストラル」がアンダーソンの研究論集や評伝などで取り扱われることは殆ど皆無のようだ。けれどこの埋もれた小編を『故郷の町』と併読すると、作者が模索の果てに辿り着いた境地を垣間見る気がする。「パストラル」は中西部の町とその周辺を巡回する腕は確かだが偏屈な医者のお話である。この医者は誰と応対しているときでもひとりで物思いに耽っている様子で、車に動植物に関する本を乗せて森へ入っては珍しい茸を見付けていた。しかしこの男の妻には食用の茸も毒茸も同じとしか思えない。医者が心臓病で急死したとき、その財産を管理した弁護士が診療室の金庫に大きな手紙の束を発見する。手紙はすべて町のドラッグ・ストアで働く女に宛てたものだったが、女は医師の一途な思いを全く知らなかった。それらの手紙から彼が冷淡な外見とは裏腹に人を細やかに観察していたことがわかる。ドラッグ・ストアの女店員をダーリンと呼んでいたがあからさまに愛を語ったり妻を批判したりはせず、ただ「自然や人間のなかに見出し感じたことに向かって彼自身の内側から流れ出し続けたもの」(注40)を書き留めていた。この作品の語り手はある時期のアンダーソンと同様に広告文を

書く仕事をしていて、この医者に住む町へ行き診察を受けたのをきっかけにドライブに誘われたりしていたが、医者を「私がこれまでに知った最も忘れ難く思う人」(注41)と呼んでいる。語り手と弁護士は200通もある手紙を昼下がりから深夜まで読んで炉で燃やしその後一緒に散歩に出るが、やがて何かに引き寄せられたかのようにドラッグ・ストアに入っているのに気付く。語り手は例の女が笑顔を保つ努力をしながら小さな体であちこち走り回るのを目にする。弁護士と語り手は店を出てしばらく何も言わず、あの医師がいつも人々を見ていたような眼差しで見詰め合って路上に佇んでいた。

アンダーソンは『故郷の町』の結末で「町での新たな生活が始まり従来の孤立が断ち切られることによって、変化が起きるときにはいつもそうなのだが、利益と損失の両方があった。幾らか特色が消えて町が次第にひとつの型にはまっていくに連れ、町の強烈な個性の一部となっていたしばしば執拗なほどに道徳的な規範も、若者に対する年長者の横暴も、気晴らしやあらゆる喜びの表現に対するピューリタンの懸念もある程度は拭い去られた」(注42)と強調した。また自動車の普及により農業従事者が町の生活に接近し、工場に働く者が農地に住むようになったのに着目して「機械に操られる現代の生活が土と土に住む人とを町に近付けた。町では土の意味が強く認識されつつある。それは莫大な富を生み出し、わがアメリカを今なお豊かな可能性を秘めた国にしているのは土にほかならないという認識なのだ」(注43)と論じている。「パストラル」の医師も土に密着して森を愛する人だった。

ここでアメリカ文学に描かれた森のイメージを少し追ってみる。思想家ヘンリー・デイヴィッド・ソローにとって森に身を置くことこそ真実に迫る手段だったと思える。「森へ行ったのは慎重に生きてきたからだ。人生の本質的な事実のみに直面してそれが教えるものを学び取り、そして死ぬときが来たらそれまで自分が生きていなかったと悟ることがないように」(注44)とソローは書いた。またナサニエル・ホーソンの傑作『緋文字』(*The Scarlet Letter*)でピューリタンの冷酷な価値観に背いて姦通した牧師と人妻が本当の心をさらけ出して自分たちのしたことの意味を確認しようとするのも森においてだった。時代が下ってアンダーソン死去の翌年に発表されたフォークナーの「熊」("The Bear")では、大森林で狩猟の奥義を極めた若者がアメリカ南部の汚点としての奴隷制度や人種問題について痛烈な告発をした。フォークナーは稀に見るスケールで無垢な自然とそれを蝕む文明の害毒との相克を描いた小説家に違いないだろう。

アンダーソンはこのように凄みのある二元論的図式を持っていた訳ではなかろう。一時は実業界さらにはアメリカの自分を取り巻く現実に嫌悪感を覚えて虚構の創造に逃げ場を求めた。彼は「人間とその想像力」("Man and His Imagination")に「著作の技術を云々するのは主として想像力を云々することだ。それも自分だけでなく他者の想像力を」(注45)と書いた。アンダーソンにとって、創作とはある種の妄念に身を委ねることだったのか。だが晩年を迎えるころには機械化の弊害や商業主義への過敏な危惧は消えた。都会の喧騒から隔たって自然と触れ合う人との触れ合いを求め、人の心の底深い所でひそやかに奏でられるパストラルすなわち牧歌の調べに聞き耳を立て、祖国アメリカの健全な姿を思い描く境地に達していたと考えてよいだろう。

以上シャーウッド・アンダーソンの目に映ったアメリカを跡付け、アンダーソンの精神的模索を少しく辿ってきた。周囲の状況への違和と拒絶はパニックをすら起こさせたが、彼は一旦隔たる過程を経て外界に新たな視線を向けることができたと言えそうである。そもそも文学的営為とは、詩人や小

説家の特異で往々にして鋭利に過ぎる感性が現実に対応して築いた虚の空間に読者が踏み入って現実認識を深め、ひいてはカオスの淵源を見据えることではなからうか。そして文学作品が事実を明瞭に示す歴史の本とか新聞とは別個に存在する意味もそこにありはすまいか。もしもこの論法が幾分妥当ならば、アンダーソンは生き方そのものを文学の本質に肉薄させた文人と呼び得るかも知れない。

注

1. Kichinosuke Ohashi, ed., *The Complete Works of Sherwood Anderson XII* (Rinsen Book Co., 1982), p.129.
2. Michael Fanning, *France and Sherwood Anderson: Paris Notebook, 1921* (Louisiana State University Press, 1977), p.48.
3. *The Complete Works of Sherwood Anderson XII*, p.401.
4. Sherwood Anderson, *Poor White* (The Viking Press, 1973), p.358.
5. *The Complete Works of Sherwood Anderson XII*, p.408.
6. *Ibid.*, p.408.
7. *Ibid.*, pp.408-409.
8. *Ibid.*, p.409.
9. *Ibid.*, p.409.
10. Henry Adams, *Novels, Mont Saint Michel, The Education* (The Library of America, 1983), p.1071.
11. *The Complete Works of Sherwood Anderson XII*, p.380.
12. Leland Ryken, *Worldly Saints* (Academie Books, 1986), p.40.
13. *Ibid.*, p.39.
14. Sherwood Anderson, *The Modern Writer* (The Arden Library, 1979), pp.6-7.
15. *The Complete Works of Sherwood Anderson XII*, p.352.
16. Maxwell Geismar, ed., *Sherwood Anderson: Short Stories* (Hill and Wang, 1962), p.xviii.
17. Jay Leyda, ed., *The Portable Melville* (The Viking Press, 1974), p.406.
18. James B. Meriwether, ed., *William Faulkner: Essays, Speeches & Public Letters* (Random House, 1965), p.7.
19. *Ibid.*, p.8.
20. *The Complete Works of Sherwood Anderson XII*, p.377.
21. William Faulkner, *New Orleans Sketches* (Random House, 1958), pp.132-133.
22. *Ibid.*, p.136.
23. *William Faulkner: Essays, Speeches & Public Letters*, pp.3-4.
24. Howard Mumford Jones and Walter B. Rideout, eds., *Letters of Sherwood Anderson* (Kraus Reprint Co., 1969), pp.174-175.
25. Sherwood Anderson, *Return to Winesburg* (The University of North Carolina Press, 1967), p.26.
26. Sherwood Anderson, *Perhaps Women* (Paul P. Appel, *Publisher*, 1970), p.7.
27. *Ibid.*, p.42.
28. *Ibid.*, p.42.
29. *Ibid.*, p.42.
30. *Ibid.*, p.56.
31. Sherwood Anderson, *Puzzled America* (Paul P. Appel, *Publisher*, 1970), p.286.

32. *Ibid.*, p.287.
33. Sherwood Anderson, *Home Town* (Paul P. Appel, Publisher, 1975), p.3.
34. *Ibid.*, p.4.
35. *Ibid.*, p.4.
36. *Ibid.*, p.8.
37. *Ibid.*, p.95.
38. *Ibid.*, p.9.
39. *Ibid.*, p.95.
40. Ray Lewis White, ed., *Sherwood Anderson's Memoirs* (The University of North Carolina Press, 1969), p.229.
41. *Ibid.*, p.222.
42. *Home Town*, p.142.
43. *Ibid.*, p.142.
44. Carl Bode, ed., *The Portable Thoreau* (The Viking Press, 1967), p.343.
45. Jack Salzman, David D. Anderson and Kichinosuke Ohashi, eds., *Sherwood Anderson: The Writer at His Craft* (Paul P. Appel, Publisher, 1979), p.376.

(もりもと しんいち 英語コミュニケーション学科)